

## 優れたオペレーションシステムは ソフトウェアの活用を促進する

酒井 秀嗣

鳥学ニュースに要望、提案、それに苦言などがしばしば掲載されるのを読むと、学会の質的変革を求める意識が会員の中に高いという印象を受ける。そこで、私も少数派の立場から学会の活性化について提言させていただきたい。

1991年5月に「鳥の生理学と生態学研究の握手」というテーマで日本鳥学会と日本比較内分泌学会との合同シンポジウムがあった。フィールドで活動している研究者（生態学）と研究室内で実験している研究者（生理学）とが協同できたらもっと幅広い研究ができるのではないか、という提案であった。両方の学会に所属していて、生理学の立場にいる私には、鳥学会にとって非常に示唆に富んだ企画だと感じた。しかし、このシンポジウムが実際の研究に生かされたか、あるいはその意図がどれだけ会員に浸透したかについては疑問視せざるを得ない。まだ、こ



うした提携による研究発表が顕著に増えてこないからである。私は卒論で鳥類のホルモンに関する研究指導を受けて以来、主として鳥類を対象とした内分泌学にかかわって来た。だから婚姻色、縄張り争い、つがい形成、巣作り、産卵等々の繁殖に関する研究報告を聞くと、直ぐに、下垂体-性腺系のホルモン調節に対する関心から、「血中の性ホルモンの変動は？」と考えてしまう。フィールドで研究している人達の中で、血中のホルモンの変動も知りたいと考えている人を何人か存じている。しかし、鳥類の血中のホルモンを測定することなど想像だにしない人も多いのではないだろうか。そういった研究者にいくつかのホルモンは容易に測定可能であることを説明しても、実際に捕獲して採血する事には難色を示される。1種類のホルモンを測定するのに0.1~0.2ml程度の血液があれば足りるが、個体にストレスを与えて抱卵や育雛を放棄されたら確かに一大事である。それならば、糞中に含まれるホルモン量を測定して血中量の変動を推定すれば個体を刺激しないで済む。勿論、測定にはRIの施設が必要で、誰もが簡単に利用することはできないが、それこそここで「握手」をすればいいのではないだろうか。また、永田尚志氏は国際鳥学会議の報告の中でいくつかの生化学的手法の有用性について述べている（No.38）。さらに、医学や哺乳類など他の動物の研究に用いられている手法にも鳥学に導入する価値のあるものが多いはずである。上記のシンポジウムをそれだけで終わらせず、その趣旨を受け継いで会員に新しい手技、手法を紹介する努力を学会に求めたい。鳥学ニュースの記事のほか、実際に研究をシンポジウムなどで紹介したり、ワークショップなどの開催が考えられる。このような企画を考える専門委員会を設けてはどうだろうか。

## 巻 頭 言

山岸会長はニュース50号で、いろいろな研究分野の鳥の研究者に、もっと積極的に参画してもらおうことを考えるべきと書いている。確かに、いろいろな動物を対象とする中で鳥類も用いた研究をしている人を含めると、生態学や行動学の分野以外にも鳥類の研究者は多い。日本鳥学会の会員でなくとも国際鳥学会議に出席する研究者もある。いくつもの学会を兼ねるのも限度があり、鳥類の研究にかかわる人を総て会員として取り込むのは現実的でないが、大会の際の特別企画などに招いて一緒に討論する事はできそうである。上記の手技の話とも関連するが、鳥類に限らず、他の動物や細胞、分子レベルの研究者との交流も重要ではなからうか。

最後に拒絶反応を示す会員も少なくないと思うが、家禽学との交流も提案したい。本会の研究は「調査」が大多数を占めているが、前述のようにいろいろな研究分野の手法が導入されてくれば、次第に「実験」の占める割合が増えると予想される。家禽は特殊な鳥で、家禽での研究結果が鳥類を代表するわけではないが、家禽を用いた研究ではすでに様々な実験的手法が用いられている。それらの手法や研究結果は野鳥の研究にも大きな影響を与えるはずである。

鳥学会は学会改革を成し遂げた。乱暴だが、この学会をハードウェア、会員をソフトウェアとたとえるならば、ソフトウェアの能力を引き出したり、うまく活動させるための優れたオペレーションシステム(OS)が必要になる。今まで述べてきた、新しい技法の紹介や導入を企画したり、学会内外の研究者の交流を促進する機構がOSのひとつにならないだろうか。

(日本大学歯学部生物学教室)

---

## 1994年度日本鳥学会大会のお知らせ

---

今年の大会は、10月8日(土)～10月10日(月)に新潟県上越市の上越教育大学で開催されます。上越教育大学のキャンパスは、上杉謙信居城の春日山の山麓から南東方向の平野部に横たわる緩やかな丘陵地にあります。交通不便なところですが、自然に恵まれた大学です。多くの会員の方々の積極的な研究発表と参加を期待しています。(大会準備委員長：中村登流)

大会の問い合わせ・申し込み先：

〒943 新潟県上越市山屋敷町1番地 上越教育大学自然系理科生物学研究室

日本鳥学会1994年度大会準備事務局

TEL：0255-22-2411 (内線472)、FAX：0255-26-8408

---

大会案内・申し込み書は本号に同封されていますので、お見逃しのないようお願いします。同封されていないときは、上記の大会準備事務局までご請求下さい。

---

## 関連学術会議

- |           |                                        |
|-----------|----------------------------------------|
| 6月25～26日  | コウノトリ未来・国際かいぎ(兵庫県豊岡市：本号)               |
| 8月14～20日  | 第5回国際行動生態学会議(ノッティンガム：no.48)            |
| 8月20～25日  | 第21回国際鳥学会議(ウィーン：no.48)                 |
| 8月20～26日  | 第6回国際生態学会議(マンチェスター：no.48)              |
| 10月 5～ 8日 | 日本動物学会第65回大会(名古屋大)                     |
| 10月 8～10日 | 日本鳥学会大会(上越大：本号)                        |
| 10月17～18日 | 第19回鳥類内分泌研究会(信州大・農)                    |
| 12月 2～ 4日 | 第13回日本動物行動学会(大阪教育大)                    |
| 12月13～16日 | 第3回国際DNA Fingerprinting会議(インド・ハイドラバート) |

関連分野の学会大会・シンポジウムに関する情報をお寄せください(〆切：2カ月前)

---

## 小笠原における最近の鳥類研究

上田 恵介

1993年度の日本鳥学会津戸基金シンポジウムは1994年1月22日(土)と23日(日)の両日にかけて、東京・池袋の立教大学で行なわれた。1日目は「メグロの生態と地位、そしてその保護」というテーマで、(1)小笠原の鳥類の起源とメグロの分類学的位置(森岡弘之)、(2)メグロの行動圏と繁殖生態(樋口広芳)、(3)メグロのセンサスと個体数推定(上田恵介・唐木雅徳・佐藤英樹)、(4)本土のウグイスとハシナガウグイスの社会構造の違い(濱尾章二)の4つの講演が行なわれ、「メジロ、メグロ、ウグイスの営巣場所選択と一腹卵数(長野康之・唐木雅徳・上田恵介)」、「メグロとメジロの採食空間の違い(池田昌枝・上田恵介)」の2つのコメントがあった。

メグロはその分類学的位置がなかなか定まらなかった鳥でヒヨドリ科、メジロ科、チメドリ科、ミツスイ科と転々とし、今はとりあえず内部形態の特徴などからミツスイ科に落ち着いているが、いくつかの疑問も残る鳥である。この点について森岡氏はミツスイ科としたが、樋口氏が生物地理学的な観点から、メジロ科の可能性はないかと問題提起し、議論が盛り上がった。

メグロの個体数は従来約3000羽程度ではないかと言われていたが、筆者は繁殖期の行動圏の面積を測り、同地域で得られたセンサスデータから、もう少し多いのではないかという推定値を出した。ただし生息地の環境が変わってきつつある現在、特定の調査地域のデータを全島にあてはめることができるかどうか、また過大な推定値が一人歩きすることによる保護上の問題点についても指摘があった。濱尾氏はハシナガウグイスの行動圏は本土のウグイスと比べてかなり小さく、また雌雄の間につがい関係が推定されるなど、一夫多妻の本土のウグイスとはかなり異なった社会構造を持っていることを報告し、それが小笠原という島の特殊事情なのか、系統的な問題もあるのかどうかなど、興味深い問題が提起された。

2日目はパート2:小笠原の鳥の現状というテーマで(1)小笠原で繁殖する海鳥(千葉勇人)、(2)オガサワラカワラヒワの現状(鈴木惟司)、(3)小笠原に定着したモズとオガサワラノスリの現状(千葉勇人・船津毅)、(4)小笠原におけるメジロの吸蜜行動(上田恵介・長野康之・唐木雅徳)の4つの講演が行なわれた。はるばる父島から参加した千葉氏による西ノ島や硫黄島などで繁殖するオオアジサシやアオツラカツオドリなど珍しい海鳥のスライドが上映された。群れが目撃されることもあるものの、普段は滅多に見られないオガサワラカワラヒワが母島とその



属島の間を季節移動しているのではないかと、鈴木氏の調査結果は参加者の興味をそそったようだ。鈴木氏は講演の中で1992年に出された小笠原諸島の野生生物に関する都立大学の報告書についても触れ、小笠原におけるモズやオガサワラノスリやオガサワラカワラヒワに関する唯一の貴重なデータが掲載されている文献であることを紹介した。配布部数が極端に少ない(空港問題にからむ都の思惑がからんでいると思われる)のでほとんどの鳥学者がこの文献の存在を知らないが、貴重な論文が掲載されているので、小笠原に関心のある多くの研究者が目を通して欲しいと結んだ。

## 「第4回オオタカ保護シンポジウム」報告

遠藤 孝一

1月22・23の両日、栃木県小山市において「第4回オオタカ保護シンポジウム」が開催されました。1日目は、約70名が参加し渡良瀬遊水池にて、調査・視察を行いました。参加者は、広大なアシ原や茫漠とした風景に圧倒されながら、チョウヒなど越冬中の猛禽類の観察を楽しみました。

夜の遊水池保護に関する意見交換会、懇親会を経て、翌日は会場を中央公民館に移し、シンポジウムが開催されました（参加者約150名）。午前中のセッション1では、兵庫県神戸市や東京都八王子市などでのオオタカの生息状況や保護活動の報告、静岡県掛川市や東京都西多摩地域における行動圏や繁殖環境の調査結果の発表が行われました。

午後のセッション2では、日本野鳥の会研究センター研究員のジェイソン・ミントン氏による特別講演「Conservation management for the recovery of Peregrine Falcons in the United States」が行われました。氏は、有機塩素系の農薬による繁殖への影響、生息状況の悪化、人工増殖や人工孵化による保護対策などについて、スライドなどをまじえながら、わかりやすく講演して下さいました。

さらにセッション3では、「湿地や里山に生息するタカ類の生態と保護」と題して、チョウヒの生態と保護（中川富男氏）、サシバの生態と保護（小島幸彦氏）など講演の後、宇都宮大学の小金沢正昭氏を司会に、パネルディスカッションが行われました。ここでは、それぞれの種の特性や保護の問題点などが明らかにされました。また会場からは、ワシタカ類が「身近な鳥」であるという視点からの保護運動展開の必要性などが、提案されました。

午後5時過ぎ、予定の時間を大幅にオーバーし、「渡良瀬遊水池保護に関するアピール」を採択して、2日間に渡る盛り沢山のシンポジウムを終了しました。最後になりましたが、ご後援いただいた日本鳥学会などの諸団体ならびに運営にあたったボランティアの皆さんに心から感謝いたします。（日本野鳥の会栃木県支部・オオタカ保護ネットワーク）



## 日本鳥学会員近畿地区懇談会の近況

年に3回ずつ京阪神でおこなってきた例会もまもなく50回をむかえます。会員数も除々に増加し、90名を越すまでになりました。この2年間の例会の様子をお知らせします。

第44回例会 1992年3月8日、神戸市勤労会館、参加者22名。1. ヤマセミ *Ceryx lugubris* のとまり場の利用様式（黒田治男氏）、2. ヒメアマツバメ *Apus affinis* における子殺し（堀田昌伸氏）、3. 絵会。

第45回例会 1992年7月19日、大阪市立大学理学部、参加者34名。1. アオゲラの帰巢（永島秀之氏）、2. 続・マダガスカルの鳥（山岸哲氏）。

第46回例会 1992年12月6日、京都大学理学部、参加者20名。1. 筑波におけるキジバトの繁殖生態について（亀田佳代子氏）、2. 京都大学北部構内のキジバトの繁殖戦略（和田岳氏）。

第47回例会 1993年3月21日、兵庫県立人と自然の博物館、参加者35名。1. ケリはハン

様な600種以上の繁殖、留鳥種の生活史を知るのは並ではない。

私が作った鳥の標本が熱帯の鳥の生活史の謎を解く助けになってくれることを願う。

(1) Blake B., The New Key to Costa Rica (Publications in English, San José, 1991)

(2) Foster M.S., Evolution 28, 182 (1974)

## オオヨシキリとヨシ原に関する国際ワークショップならびに公開講演会の報告 浦野栄一郎

ヨシ原に密着して生活するオオヨシキリの生態、とくに一夫多妻制の配偶システムについては、近年、日・欧の複数の地点で詳細な研究が行われ、多くの共通点とともに地域間での相違点も明らかになってきた。そこで、日欧の研究者が一堂に会し、各調査地の細かな条件の差異をつき合わせることで、本種の繁殖生態に生息場所の特性がどのように影響しているかを明らかにすることを主な目的として、1994年1月25日～27日に大阪市立大学文化交流センターで国際ワークショップ“The Great Reed Warbler and Reed Marsh as its Habitat”が開催された(主催:淀川におけるオオヨシキリ調査グループ)。

会議は、江崎保男(姫路工大)・C.K. Catchpole(イギリス)・S. Bensch(スウェーデン)・B. Leisler(ドイツ)・A. Dyrce(ポーランド)・D. Hasselquist(スウェーデン)・浦野栄一郎(農業研究センター)の7名が発表し(総説3題、個別の調査に基づくもの4題)、それぞれの発表の後で、15名程の参加者が十分な時間をとって討論するという形で進められた。

複数の発表者が、日・欧の繁殖密度の違いを指摘した。1000平方メートルに満たない小さななわばりがヨシ原を埋め尽くしているという日本の状況は、中部以北のヨーロッパでは考えられないことのようにだ。なわばり外に存在する豊富な餌資源が高密度での繁殖を可能にしていると考えられるが、これを水田の存在と結びつける意見がヨーロッパ側参加者から出された。一方、ヨーロッパではいずれの調査地でもなわばり内の餌条件がかなり重要で、これが日本とは違った形で、雌による配偶者選択や同じ雄とつがった雌同士の関係に強く影響している可能性が示された。これらの点については、以前から論文を読んで見当をつけていたのだが、今回、調査地の写真や地図を見せ合い、直接話を聴くことで、理解が深まった。

ワークショップに引き続いて1月28日には公開講演会「鳥の眼からみた水辺の環境-日本とヨーロッパの比較」が開かれ(鳥学ニュース49号参照)、76名の一般参加があった。山岸哲氏は、河川敷の生物相互に見られる関係を鳥を中心に概説した後で、オオヨシキリを例にして、ヨシ原や周辺環境の違いによって、同種の鳥の行動や生態がどれほど変わってくるのかを示した。Dyrce氏は多数の美しいスライドをまじえて、中西部ヨーロッパの水辺環境と鳥類の現状・保全についてわかりやすく紹介された。会場の都合もあって、質疑応答の時間が十分にはとれなかったのは残念であった。

(農業研究センター鳥害研究室)



ボソガラスを追い払えるか? (大野義徳氏)、2. コミミズクの越冬 (中川宗孝氏)、3. コミミズクとの出会い—ビデオ発表 (上山義之氏)、4. 総会。

第48回例会 1993年9月4日、大阪市立大学文化交流センター、参加者31名。1. 鳥からみた森林のかたち (日野輝明氏)、2. オオヨシキリの生息状況とアシ原—淀川を例に (浦野栄一郎氏)。

第49回例会 1993年12月11日、森林総合研究所関西支所、参加者32名。1. 越冬期のカ

モ類の選択する池の環境 (武田恵世氏)、2. ベニイロフラミンゴの繁殖行動と退色 (能田由起子氏)

本会は近畿地方在住の日本鳥学会員を中心に構成され、年3回の例会を開いています。年会費は500円です。本会の活動に興味をお持ちの方は事務局までご連絡ください。なお、事務局は1994年から以下に移転しました。

〒612 京都市伏見区桃山町永井久太郎官有地  
森林総合研究所関西支所鳥獣研究室 日野輝明  
明気付け。(江崎保男)

## コスタリカ通信 (4) 鳥類採集

直木一弥

生物の採集と言えば昆虫採集や食草の採集を想像されるかもしれない。ところがどっこい、ここコスタリカでは未だに?鳥の採集が行われているのである。もちろん採集は誰にでも許されているわけではなく、国立博物館鳥類学部門の一部の研究者にだけあって、コスタリカでは動植物の採集は野生生物局によって一切禁止されている。

コスタリカに現存する大半のコレクションは前世紀のものであり保存状態はいいとは言えない。また1950年から85年までの35年間に2/3の熱帯雨林が牧場やバナナのプランテーションに姿を変えており<sup>(1)</sup>、それにとまなう移入種や各種の生息域変化は非常に激しい。そうした中で、国立博物館はここ数年、在庫の標本の整理と不足種の採集に力を入れている。

幸運にも昨年末から数回の採集旅行に同行する機会に恵まれた。採集は普通冷蔵設備のないフィールドでの泊まりこみになる。熱帯では鳥の保存がきかないため、採集した鳥は当日のうちにはく製にしまわなければならないランプの光のもとで夜中12時~1時までの作業になる。

研究のために犠牲になってくれた鳥を一羽も無駄にしないために羽一枚たりとも失わないよう細心の注意を払って作業する。ポランティアとはいえ責任の重さは一緒に一日20時間弱の作業はしんどいが、新熱帯区ならでは



の色鮮やかなハチドリ、フウキンチョウ類やアリドリ類が手にとって観られるのは楽しいものである。

性別、S.O.、脂肪量、胃内容物などは、もちろんデータとして残さないといけないのだが、それ以外にも個人的に換羽状態や油壺の数などもチェックしている。熱帯では温帯と違って繁殖期、換羽期などが同じ科の中でも種によってバラバラで、また換羽期、繁殖期が重なる種もあり<sup>(2)</sup>、生活サイクルがよくわかっていない種が多い。比較的、研究が良く行われているコスタリカでも鳥類学者は10人にも達せず、また日本と違ってアマチュアの研究者がほとんどいない。この人数で非常に多

---

## 『コウノトリ未来・国際かいぎ』のお知らせと参加募集

兵庫県と豊岡市の共催により、ニホンコウノトリの野生復帰を目指して、次のとおりシンポジウムとつどいを開催します。参加は無料ですが、予約制ですので参加希望の方は事務局まで御連絡下さい。申込書を送付します。ただし、定員に達し次第受け付けを終了します。

### プログラム

#### 第1部<コウノトリ国際フォーラム>

日 時：1994年6月25日(土) 10:00~16:00

場 所：兵庫県豊岡市 豊岡市民会館文化ホール (第2部も同)

概 要：国内外の鳥類研究者による研究報告とパネルディスカッションによって、ニホンコウノトリ野生復帰の方策を探ります。

報告者① Koen Brouwer (オランダ・EEP委員長)

② Michael Wallace (アメリカ・ロスアンゼルス動物園)

③ Vladimir Andronov (ロシア・ヒンガンスク自然保護区)

④ Catherine E. King (オランダ・ロッテルダム動物園)

⑤ 松島興治郎 (豊岡市・コウノトリ保護増殖センター) (同時通訳あり)

#### 第2部<はばたきのつどい>

日 時：1994年6月26日(日) 13:00~16:00

概 要：地元において長年の間コウノトリとともに暮らしてきた歴史を振り返りながら、地域文化の発展と夢の実現を楽しいつどいの中で探ります。

出演者 柳生博、わらび座、NHK生きもの地球紀行スタッフ、地元の人々、他

問い合わせ・申し込み：〒668 豊岡市中央町2-4 豊岡市教育委員会社会教育課

Tel. 0796(23)1111 Fax. 0796(24)4669

日本鳥学会はこの会議を後援しています。

---

## お 知 ら せ

### 【基金運営委員会】

○清水基金(優れた鳥学研究の計画に対する補助金)：清水和雄氏の寄付金を基にした鳥学研究補助は、昨年10月末に申込を締め切り、基金運営委員会で審査を行いました。その結果、大阪市立大学理学部動物社会学研究所所属の水田 拓さんの申請を採用と決定いたしました。

○津戸基金(鳥学のシンポジウム開催の費用補助)：前号鳥学ニュースでお知らせいたしました津戸基金によるシンポジウムの申込は、3月末で一応締め切りましたが、残念ながら応募者なしです。せっかくの基金ですので、申込締め切りを6月20日まで延長いたします。年度後半の秋か冬にでも開催を予定されておられる方など、ふるってご応募下さい。申込の要領は鳥学ニュース50号をご覧くださいませよう。(基金運営委員長 正富宏之)

### 【事務局】

○谷口一夫氏から鳥学基金へ5,000円の寄付を頂きました。紙面を借りて感謝します。

○公益信託 増進会自然環境保全研究活動助成基金の募集が事務局に届いています。絶滅のおそれのある小動物の保護、増殖に関する調査、研究および、生息環境復元、回復に関する調査、研究を行っている研究者や機関の活動に対しての助成です。今年度に引き続き来年度の募集もありますので、興味のある方は下記までお問い合わせ下さい。

〒113 東京都文京区湯島 2-29-3 財団法人自然環境研究センター内

公益信託 増進会自然環境保全研究活動助成基金事務局

○平成6年5月より郵便振替口座の口座番号が、郵便振替通常振込み新処理システム導入に伴い、

お知らせ

下記のように変更になりました。ただし、日本鳥学会私製の振替用紙は、従来どおりの口座番号で利用できます。

新振替番号 00110-0-6599

○アテネ書房より出版された『鳥』の復刻版は鳥学会会員が購入すると10%のマージンが学会に入る契約となっています。学会の会計をうるおすためにも、多数の会員の購入をお勧め致します。

『鳥』 全11巻(第1号~第55号)、解説と総索引(別巻)  
定価128,000円のところ、会員価格115,200円

○平成6年3月3日 日本野鳥の会研究センター、会議室において第1回常任評議会が開催されました。

○日本工学会より学術法人法(仮称)制定運動に関する協力要請があり、これに賛同しました。

○『第4回 オオタカ保護シンポジウム』(主催:オオタカ保護ネットワーク・日本野鳥の会栃木県支部)、『第48回愛鳥週間 全国野生保護のつどい』(主催:財団法人日本鳥類保護連盟)、『コウノトリ未来・国際かいぎ』(主催:兵庫県、豊岡市)に協賛しました。

○『全国野生生物保護実績発表大会』が昨年12月20日に開催され、評議員の竹下信雄氏に出席していただきました。

○『平成6年度野生生物保護功労者審査』が平成6年3月18日に開催され、評議員で鳥類保護委員でもある中村司氏に出席していただきました。

訂正

No.50でお知らせした、1994年度役員及び諸係分担のうち、中村一恵氏は目録委員ではございませんでしたので訂正しお詫び致します。

鳥学ニュース No.51

1994年5月1日 発行 (会員配布)

発行 日本鳥学会

〒558 大阪市住吉区杉本3-3-138 大阪立大学理学部動物社会学研究室気付

TEL. 06-605-2607 FAX. 06-605-2522

発行人 山岸 哲 印刷所 丸二印刷

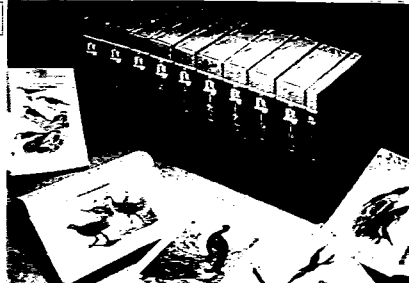
編集 江崎保男・堀田昌伸

会員の皆様へ—限定200セットの小部数ですので、お早めにお申込み下さい

日本鳥学会会誌 職前全号

復刻 鳥

総ページ5700p、総編350本、  
原簿・調査400本、写真・図版1000点  
30年間にわたる調査・研究の全記録



カタログご希望の方はご連絡下さい。

会員割引価格で発売中

●特別割引価格=115,200円(税込)

\*分割払いもできます。  
\*送料、アテネ書房負担

本巻: 全11巻(創刊号~第55号)  
別巻: 「解説と総索引」1巻  
発行: 1915年~1944年  
セット定価: 128,000円(消費税込み)  
直接下記へお申込み下さい。

アテネ書房

東京都文京区本郷1-1-1 〒113  
☎03-3816-3871 FAX03-3816-3873